

平成28年度 企画展

写真が語る 思い出の福井駅前

平成28年(2016)春、福井駅西口に地上21階、地下2階の再開発ビル「ハピリン」がオープン。ガラス張りの広場、能舞台のあるホール、福井市自然史博物館分館・プラネタリウムが備えられ、福井の玄関口であり、駅前の新たなランドマーク、市民の憩いと交流の場としても期待が寄せられています。

平成17年のJR福井駅の新駅舎開業を皮切りに、19年には福井駅東口の再開発、21年に北陸新幹線の福井駅部分の高架完成など、福井駅周辺の景観は大きく変化し、新たな魅力を増しています。そのいっぽうで、長く親しまれた町なみは、静かに姿を消しつつあります。この企画展では戦後の福井駅前について、写真を中心とした資料で振り返ります。

なお、ここでは「福井駅前」のおおよその範囲を、東は福井駅、西は大名町通り、北は福井県庁、南は城の橋通りまでとして取り上げます。

1. 「福井駅前」の誕生 明治～昭和戦前期

現在の福井駅前にあたる地域は、もともとは福井城とその城下町でした。明治維新後、旧福井城は解体されましたが、その後も、県庁や市役所、裁判所等の役所や学校などが旧福井城の周囲に配置され、



絵はがき(昭和戦前期の福井駅前)

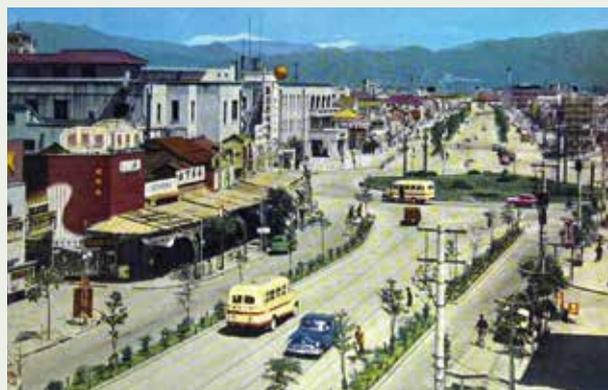
この地は県の政治の中心でありつづけました。そして、明治29年(1896)、北陸線の敦賀・福井間が開通し、福井駅が開業したことで、駅から旧福井城周辺の官庁街に向かう福井駅西口側が「福井駅前」と認知されていきます。

それまでは、現在の呉服町周辺がおもな商業地でした。城の西側に町家が広がり、北国街道が通っていたためです。しかし、福井駅開業後、人の流れが変わり、駅から官庁街、大名町を経て呉服町周辺を結ぶ地域が新たな商業地となっていきます。大正期に県庁が福井城本丸跡に移転し、昭和3年(1928)、県庁跡地にだるま屋百貨店が開店すると、その周辺にも商店が増えていきました。そして、福井駅前は北陸でも有数の賑わいを見せていきます。

展示では、明治時代から昭和戦前期までの古写真や絵葉書、地図や鳥瞰図なども紹介し、「福井駅前」の初期のようすを振り返ります。

2. 戦後の町なみ I 空襲・震災から復興

昭和20年(1945)7月19日の福井空襲により、福井駅前を中心とした一帯は大きな被害を受けました。被災面積は市街地の95パーセントに及び、一面の焼



絵はがき(昭和30年代・大名町交差点付近から福井駅を臨む)

野原と言える惨状を呈しました。同年9月の無条件降伏後、21年に「特別都市計画法」による復興都市計画が策定されました。福井駅前にかかわるところでは、街路の拡幅、福井駅の移設、公園・緑地の設置などが挙げられます。しかし、その実現を待たず、昭和23年6月28日、福井地震が発生しました(M7.1、震度6(烈震))。福井駅前を含め、福井県嶺北地方の広い範囲で多数の死傷者、建物の倒壊・火災、橋や道路の損壊など、大きな被害を受けました。地震後、復興計画は再検討され、福井駅前から本町・呉服町に至る一帯が商業地域に指定されます。福井は、度重なった被災から急速に復興を遂げ、昭和27年に福井ステーションビルが開業し、同年7月には「福井復興博覧会」が開かれました。

ここでは、空襲・震災の記録写真を含め、被災から復興期の状況を振り返ります。

3. 戦後の町なみⅡ 昭和30～40年代

国内の高度経済成長を背景に、福井前は福井の中心街として発展します。本町、新栄などの商店街が整備され、だるま屋百貨店が昭和28年(1953)に新館をオープンし屋上遊園地を設置するなど、福井前は家族で買い物からレジャーまで楽しめる地域として親しまれます。都市公園や街路樹、歩道の花壇も整備され、町の美観も整います。イベントも盛ん

に行われ、昭和29年から開始された「福井まつり」は、「福井フェニックスまつり」として福井を代表するイベントに成長しました。昭和45年からは、だるま屋前通りを歩行者天国として開放する「日曜広場」も開催されました。

ここでは、イベントの写真や航空写真もまじえて、福井前の発展と賑わいを紹介します。

4. 変わりゆく福井駅前

昭和50年代に入るところには、福井前をとりまく状況は大きく変化していました。自家用車の普及とともに、郊外に広い駐車場を備えた大規模な商業施設が建設され、買い物客を集めるようになります。駅前では、40年代に、ほていや(ユニー)、ファッションランド・パル(ジャスコ)等が進出、だるま屋百貨店と西武百貨店との提携などとともに、新たな町づくりが模索されていました。また、昭和56年の福井県庁舎の改築、59年の福井人絹会館(昭和12年竣工)の解体など、町のランドマークが姿を変えた時期でもあります。ここでは、昭和後期から平成にかけて、「福井駅前」のさまざまな未来像が描かれたようすも含めてご紹介します。

それぞれの時代の写真で思い出を振り返りながら、これから花開く「福井駅前」の未来の姿にも夢を描いていただければと思います。(瓜生由起)



昭和50年(1975)の福井駅前 出典：国土地理院ウェブサイト/地図・空中写真閲覧サービス(整理番号7523を編集)

写真展「写真が語る 思い出の福井駅前」

平成28年4月22日～5月22日

観覧料：通常の入館料でご覧になれます(一般100円 高校生以下・70歳以上の方 無料)

北海道樺太在住福井県人写真帖

法量 26.0×18.5(cm)

時代 大正3年(1914)

福井県は明治～大正期にかけて、北海道へ移住する人が多く、大正9年におこなわれた第1回国勢調査によれば、福井県生まれの北海道在住者数は、4万7000人余りにもものほります。福井県から北海道への移住が本格的に始まったのは、明治10年代後半からです。20年代を通してその数は増加し、30・31年には年間6000人以上の福井県人が北海道へ移住しており、全国でも3番目の人数でした。移住者の出身地を郡別にみると、丹生郡・大野郡・坂井郡が圧倒的に多く、大半は嶺北地域の人びとで、大飯・遠敷・敦賀郡は極めて少なかったようです。こうした移住者の多くは、北海道で農地を開拓し農業経営をめざすことを目的としており、その数は移住者全体の5割以上を占めます。また、その中には、坂井郡磯部村や大野郡野向村など、同郷人がまとまって移住する「団体移住」も少なくありませんでした。

今回紹介する資料は、大正初期に北海道と樺太に在住した福井県出身者の写真帖です。大正3年(1914)に、同地の福井県人会によって発刊されました。この写真帖には、468名の氏名、年齢、出身地、渡道年、職業が記されています。

まず、出身地別にみると、多い順に坂井郡124名、次いで福井市114、丹生郡79、足羽郡59となり、この5つの地域が全体の8割を占め、さらに大野・吉田郡など嶺北地域の出身者でみると全体の98%を占めます。いっぽう、敦賀や小浜を含む嶺南地域の出身者はわずか11名しかいません。また、移住した年をみると、古くは

幕末期に2名いますが、明治10年代が82名、20年代が151、30年代が147です。全体の出身地や移住年は、北海道移住の全体傾向とほぼ一致しています。

次に移住先(大正3年での現住所)をみると、札幌区が91名、小樽区58、旭川区49、夕張郡登川市街28、函館区26と全体の5割を占め、大半が道内の都市部に集中しています。これは、この写真帖に掲載されている人物の職業が商工業者やサービス業が多いことに関係します。

次に職業別をみてみましょう。農業従事者は22名、漁業など水産業関係が5名で、全体の5%余りしかありません。商工業では、米穀商が35名と多く、次いで料理屋18、旅館15、海産物商15、薬種売薬商15、木材商14、呉服商11となっています。このうち、興味深いのが、「越前」「福井」「若狭」「三国」「大野」というように出身地を店名にしていることです。商工業以外では、寺院の住職が15名、官吏9、医師8となっています。このうち、寺院については、浄土真宗や日蓮宗など宗派はさまざまですが、その多くが現在もそれぞれの地域で存続していることが確かめられます。

福井県出身の北海道移住者について、どこの誰が何処でどのような職業に就いたかについてまとめて記録された資料はほとんどありません。そうした意味で、468名と明治期の移住者総数からみれば、わずかではあります。本県出身者の動向を知ることができる貴重な写真帖といえます。

(山形裕之)



木箱とそれに納められた札

法量 (箱)40.8×13.5×4.7(cm)

今回紹介する資料は、あわら市吉崎の春日神社境内にあった金刀比羅神社に納められていた、木箱とその箱に納められていた札です。

木箱と札のあった金刀比羅神社は、北前船主であった個人により建立されたものです。天保年間の建立だろうといわれています。北前船主個人により神社が建立されるのは非常に珍しいことだといわれ、海運業を営んでいたことと、一般にいわれる金刀比羅神社のご利益を考え合わせると、主に海上安全を祈願したと考えられます。「こんびらさん(金毘羅さん)」として親しまれ、金刀比羅宮、琴平神社、金刀比羅神社の総本社である象頭山松尾寺金光院(香川県。現 金刀比羅宮)の祈禱札を、毎年のように貰い受けていたとみられ、多くの祈禱札が残されています。

まず、木箱の形状を見ましょう。直方体で、蓋はスラ



木箱

イド式に開閉するものです。塗がなされています。そのほかには特にこれといった特徴はありません。

箱の中には、江戸時代後期のものとみられる、寺院と神社の祈禱札などの札が、145点納められています。札は大小さまざまで、全国各地の寺社のものがあり、判明している寺社は、北は湯殿山(山形県)、南は左記の象頭山松尾寺金光院のものともみられるものまで、広い範囲の御札が納められていました。中には、干支と性別の書かれた札や子安観音として知られる三重県鈴鹿市の白子山観音寺(現 白子山子安観音寺)の御守なども入っており、個人としての祈願であるものが見られ、集落や講などの共同祈願というよりは個人の祈願によるものが納められていたのではないかと考えています。また、「蘇民将来子孫守護」と書かれた札が2枚、疱瘡除けとしても有名であった床浦神社(広島県竹原市忠海床浦)からのものとみられる「床浦大明神疱瘡守」と書かれた札が11枚と複数あるものもあり、代参で手に入れた札を納めた可能性も考えられます。

今回紹介したような御札などは、左義長などで燃やされることが多いため、このような形でまとまって出てくることはそう多くはないものと考えられます。そうした点でも貴重な資料だと考えられます。(川波久志)



湯殿山表口別當大日坊 湯殿山本地仏札



金毘羅大権現 病除の守札



床浦大明神 疱瘡の守札

桜谷社年代略記

法量 24.0×18.1 (cm)

時代 安政3年(1856)

本書は当館が平成9年(1997)に収集したものです。表題にみえる「桜谷社」とは、現在坂井市三国町に所在する三国神社のことで、江戸時代には山王社とも呼ばれました。そして、「年代略記」とあるように、本書の内容は三国湊の氏神である桜谷社に関するさまざまなできごとを年代順にまとめた記録であり、天文9年(1540)から安政3年(1856)までのことが記されています。表紙には、整理のための符号とともに、三国湊の豪商として知られる内田惣右衛門家の印が捺されており、内田家の旧蔵書だったことがわかります(写真1)。

内田家は元禄16年(1703)に福井城下町から三国湊へ分家した商家で、屋号を室屋と称しました。初代惣右衛門は三国湊の元新町で搗米業・麴業を営み、2代惣右衛門が廻船業を始めたとされます。19世紀前半、5代惣右衛門の頃に大きく発展し、三国湊を代表する豪商に急成長しました。本書が作成された安政3年は7代惣右衛門の頃にあたります。

平成25年(2013)、内田家に伝来した約7000点の古文書がみくに龍翔館(坂井市)に寄託されました。本書はいつの頃か、その内田家の古文書群から散逸してしまったものと思われるが、その経緯は不明です。

さて、本書でとくに詳しく記載されているのは、天保2年(1831)に始まる桜谷社の大規模な社殿改築の普請事業についてです(写真2)。これには多額の費用を要しましたが、「直触町人」と呼ばれる三国湊の上層町人7人が合計銀150貫匁余を寄進し、天保10年によく完

成しました。天保6年に5代惣右衛門が没し、家督を継いだ6代惣右衛門の後見役の内田十内(分家、西内田家)は、寄進に際して次のように他の直触町人を説得したといっています。

此の造営、最初開地土持より専ら世上の困窮を救はんため、当家先主(5代惣右衛門)発起せられ、其の余頭分の衆中、心を合わせてかく大造の普請となりし事なれば、当家を始め頭分の面々は、格外の奉加出銀すべき道理かと存ずる

凶作が続いて米価が高騰した天保期、三国湊では困窮者のために米の別売場が設置されました。一方で、この普請事業も職人や日雇労働者の助成のために間断なく続けられたとされ、内田家を中心とする豪商たちが行った貧民救済事業の一環としても評価されています。

また、桜谷社祭礼(現在の三国祭)に関する記述もみられます。宝暦3年(1753)に「祭礼に始めて木場町・今町両町組にて桜山を出す」、同7年に「元新町・下新町両町組にて武蔵野の笠鉾を出す」とあり、さらに元新町・下新町は以後隔年で山車を出すようになったことが記されています。これまでも三国祭については、宝暦3年以前に遡る具体的な歴史資料は確認されていませんが、いずれにせよ宝暦期は三国祭の歴史を考えるうえで重要な画期になるのではないのでしょうか。なお、上記の元新町・下新町のように各町が交代で山車を出す「山番」方式は、形を変えながら現在の三国祭まで受け継がれています。

(久角健二)

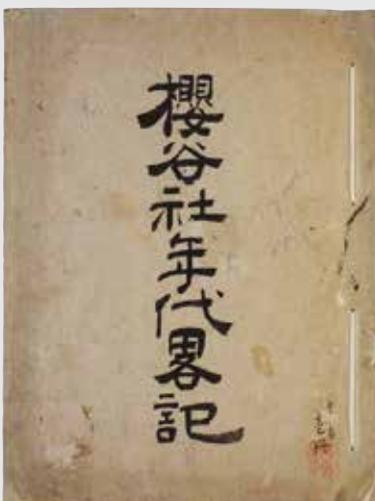


写真1

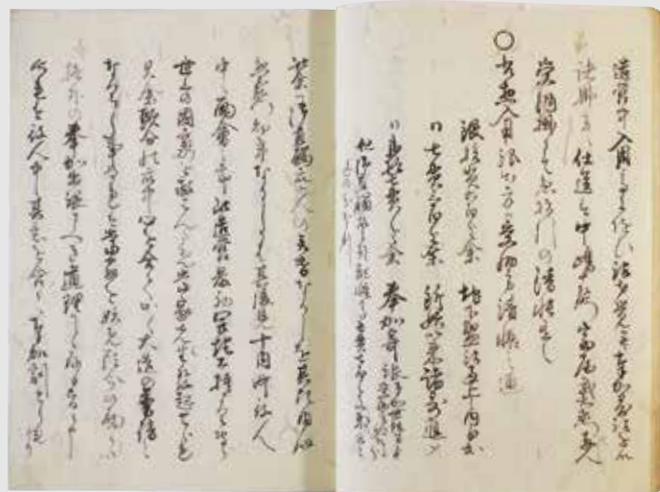


写真2

お正月の「天神講」で一躍有名になった越前の天神信仰ですが、江戸時代以前に遡る越前での天神信仰やその資料は、意外と知られていません。今回、福井市西木田の持寶院じほういんに残る2幅の天神絵像を紹介し、天神信仰の一端を垣間見たいと思います。

1 持寶院略史

持寶院は福井市西木田に所在する真言宗智山派の寺院です。創建は奈良時代の天平宝字元年(757)に藤原仲麻呂によると伝えられています。なお、創建から江戸時代初め頃まで寺号は「寶光寺」と称していました。平安時代の天長元年(824)、法相宗から真言宗に改宗したとされます。越前における真言宗寺院でもとりわけ重要な位置を占め、特に中世から近世にかけて勢力が盛んであったことは、越前の真言宗寺院で中心的役割を果たした瀧谷寺所蔵の文書(県文)からも窺うことができます。多くの神社と関わりのあった持寶院は、明治時代に入り神仏分離策による大打撃を受け、降って昭和20年(1945)7月19日の福井空襲や昭和23年6月23日の福井地震による火災のため多くを失いましたが、仏画類等は空襲前に疎開していたため幸い残り、在りし日の持寶院の姿を伝えています。

2 天神信仰について

「天神」は高天原から降ってきた神や、雷等の天象の神を指していましたが、のちに神格化された「菅原道真」の代名詞として認識されるようになりました。菅原道真(845~903)は学者の家柄で、宇多天皇に重用され右大臣にまで上り詰めましたが、昌泰4年(901)に政敵藤原時平らにより大宰権師として九州に左遷されました。なお、都から瀬戸内海を通る太宰府への途上、休憩のため下船した際に綱を巻いて道真の座所とした、いわゆる「綱敷天神」の伝承が各所に残されています。また、水面に映った自らの衰えた姿を見て、左遷の無念を思い、怒りのあまり白髪と化し、恐ろしい形相を見せたともいわれています。太宰府の地で無実を訴え続けた道真は、延喜3年(903)になくなりました。その後、道真の左遷に関わっ

た人びとの不慮の死や宮中への落雷等が道真の怨霊によるものとされ、これを慰めるべく「天満大自在天神」として崇めるようになりました。このように恐ろしい神として認識されていましたが、中世以降、生前の学者あるいは優れた詩人としての面が強調され、和歌や学業の神様としての信仰も盛んとなりました。現代では受験シーズンや、特に越前では天神講や、節句でなじみの深い神様と言えるでしょう。

3 天神の図像

つぎに絵画や彫刻に表された天神像のうち、礼拝対象とされた像について見てみましょう。もっともよく知られているのが平安貴族の正装である衣冠束帯い かん ぞく たいで笏を持った姿の像(束帯天神像)です。座るものの他、立ち姿の像も古くから見受けられます。お顔は眉を寄せた厳しい表情のものもありますが、時代が降るとすまし顔が多くなります。この束帯天神像の中で「綱敷天神」と呼ばれる一群はとりわけ特徴的です。まず円座のように巻かれた綱を座具としています。お顔は目をむき出し怒りを顕わにし、髪は白髪です。笏は片手で下部を持ち、もう片手で上部を握る、あるいは押さえています。威儀を正すのではなく、笏を強く握ることにより怒りを示していると考えられます。左遷途上のエピソードとして各地に類似の縁起を持つ神社も多く、天神信仰において重要視されました。束帯以外では「渡唐天神」と呼ばれる一群が有名です。南宋の禅僧無準師範の元に参禅した際の姿とされ、主に禅宗寺院から広まりました。中国風の道服を着し、梅の枝を持つ独特の姿です。

4 持寶院所蔵天神絵像の紹介

(1) 絹本著色 束帯天神坐像 1幅 室町時代

公卿の正装である衣冠束帯姿の天神像ですが、円

座状の敷物に座ることからいわゆる綱敷天神と考えられます。ただし、多く見られる綱敷天神の図像と比較すると、まず怒りを顕わにしんもく瞋目とすることが多いのに対し、本図では眉尻をやや上げるものの、表情に明確な怒りは見られません。また、笏の持ち方も綱敷天神での左右手それぞれで笏の上下端を握る姿に対し両手で把笏する等、典型的な綱敷天神像より落ち着いた気品あふれる姿に表されています。この他の特色として、装束は左肩はやや上がっていますが、右肩は撫で肩となり、中世以降に見られる強装束ではなく古様を示しています。右斜め向きの像は他にも見られますが、黒い袍に対し、黄金色金具の太刀と石帯を大きく見せ、アクセントとしている点も視覚を重視した構成といえるでしょう。また、天神と縁の深い紅梅が画面向かって左にフレームアウトから入り込む形態で描かれていますが、定型化したものでは天神像の背後に描かれるのに対し、眼前に描かれているのも本図の特色と言えるでしょう。顔の輪郭はふくよかで四角く、あまり誇張のない面貌や太い笏の輪郭墨線等から、製作時期は室町時代と推定されます。ただし、定形化していないおおらかさや服制の古様な点等、古い図像を手本とした可

能性も考えられます。剥落や擦れにより画面が著しく見にくいことが惜しまれますが、中世まで遡れること、他に類例の少ない図像であることが重視されます。

さて、持寶院と天神信仰の関係について、江戸時代の越前の地誌として著名な『越前国名蹟考』によると、「門内天神」と称される像、または社が境内に存在していたことが特記されており、よく知られていたことがわかります。明治23年(1890)に持寶院より発行された『天満大自在天神畧縁起』が、江戸時代の「門内天神」の姿をそのまま伝えているならば綱敷天神の絵像を祀っていたことにはなりますが、今回紹介した絵像との関係は不明です。(以下次号) (河村健史)

■法量(cm)

本紙高79.6/幅36.0

■図様 右斜め正面。冠をかぶり、垂纓を右肩に垂らす。眉尻をやや上げる。口・顎鬚を生やす。束帯形、胸前で両手で笏を持つ。太刀(直刀)を佩く。足裏を合わせ円座に坐す。右上に紅梅(部分)、左上に色紙形。

■構造 掛幅装。絹本着色。

■彩色・仕上げ 袍黒。眼球茶色。太刀紐赤。平緒緑、石帯金箔。太刀・太刀紐・平緒の輪郭截金。

■銘等

色紙形①(向かって右)墨書

「離家三四月/落涙百千行/萬事皆如夢/時時仰彼蒼」

(道真「自詠」『菅家後集』)

色紙形②(向かって左)墨書(判読不能)



9月

- 5日(土)～10月20日(火)
ギャラリー展「福井国体ポスター展」
(エントランスギャラリー)
- 8日(火)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料貸出)
- 10日(木)
京都女子大学来館(博物館実習)
- 11日(金)
富山県[立山博物館]来館(資料貸出)
- 14日(月)
美浜町教育委員会来館(資料調査)
- 19日(土)
ふくい歴博講座「三崎玉雲家と福井の種痘事業」
(研修室)
- 22日(火)
柏市教育委員会来館(資料貸出)

10月

- 13日(火)
福井県文書館来館(資料貸出)
- 14日(水)
福井県ふるさと文学館来館(資料貸出)
- 16日(金)
越前市武生公会堂記念館来館(資料貸出)
- 24日(土)～11月23日(月・祝)
特別展「再会・ふくいゆかりの名宝たち 里帰り文化財展」(特別展示室)
- 24日(木)～12月8日(火)
写真展「福井の文化財 建造物」
(エントランスギャラリー)
- 31日(土)
戦国大名気分を味わうお茶会
(エントランスロビー)

11月

- 1日(日)
バスツアー「立山と白山」
- 3日(火・祝)
特別展「再会・ふくいゆかりの名宝たち 里帰り文化財展」展示説明会(特別展示室)
- 10日(火)
国立歴史民俗博物館来館(視察)
- 15日(日)
特別展「再会・ふくいゆかりの名宝たち 里帰り文化財展」
展示説明会(特別展示室)
- 18日(水)～20日(金)
全国博物館大会(広島県呉市)
- 19日(木)
敦賀市立博物館来館(資料貸出)

12月

- 1日(火)～4日(金)
ふれあい文化子どもスクール見学来館
- 3日(木)
勝山市教育委員会来館(資料調査)

- 6日(日)
バスツアー「旧北陸線廃線跡をたどる」
- 10日(木)～1月26日(火)
ギャラリー展「引札&干支の郷土玩具」
(エントランスギャラリー)
- 11日(金)
福井県立若狭歴史博物館来館(資料貸出)
- 18日(金)
福井県博物館協議会現地視察研修
(福井県立若狭歴史博物館他)
- 19日(土)～1月24日(日)
企画展「すごろく 冬の楽しみ」(特別展示室)
- 19日(土)
企画展「すごろく 冬の楽しみ」展示説明会
(特別展示室)
- 20日(日)
ふくい歴博講座「越前・若狭の名所」(研修室)
- 20日(日)
キッズミュージアム「合体すごろくを作って遊ぼう!」
(研修室)

1月

- 9日(土)
企画展「すごろく 冬の楽しみ」展示説明会
(特別展示室)
- 16日(土)
ふくい歴博講座「絵すごろくを読む」(研修室)
- 21日(木)
福井県文書館来館(資料調査)
- 22日(金)
福井県博物館協議会講演会(講堂)
- 27日(水)
福井県文書館来館(資料貸出)
- 28日(木)～3月27日(日)
写真展「冬のまつりと行事」
(エントランスギャラリー)
- 31日(日)
記録映像上映会「豪雪」(講堂)

2月

- 3日(水)
九州国立博物館来館(資料調査)
- 10日(水)
滋賀県立安土城考古博物館来館(資料調査)
- 13日(土)～3月21日(月・祝)
企画展「よみがえる文化財 被災文化財を未来に」
(特別展示室)
- 19日(金)
京都国立博物館来館(資料調査)
- 20日(土)
ふくい歴博講座「掛紙に見る駅弁の歴史」(研修室)
- 25日(木)
美浜町教育委員会来館(資料貸出)
- 26日(金)
被災文化財保存修復ワークショップ(研修室)